

陳冠廷立法委員インタビュー

国立台湾大学歴史学研究所博士課程 寺山 学
(元日本台湾交流協会台北事務所総務室長)

今回は、2024年立法委員選挙で初当選した日本留学経験者である陳冠廷立法委員（民進党籍）より、日本との関係、日台関係に対する見方及び台湾の若年層の政治的態度などについて話を伺いました。

- ・インタビュー実施日 2024年6月24日
- ・インタビュー実施場所 立法院陳冠廷委員事務室

<陳冠廷立法委員略歴>

1986年、嘉義市生まれ。嘉義県の高校卒業後、渡米。ウィスコンシン大学マディソン校卒業後、2012年東京大学公共政策大学院にて修士号取得。在学中、安井美沙子参議院議員（当時）事務所等にてインターンシップに参加。2016年、国家安全会議研究助理に就任。

2017年、シンクタンク「台湾世代教育基金会」副執行長に就任（2020年、同執行長に就任）。

2018年、台北市政府副發言人（スポークスパーソン）に就任（2020年まで）。

2022年、蔡英文民進党主席特別助理に就任。

2024年、立法委員選挙（嘉義県第二選挙区）に出馬。5名の候補者が立候補する中、得票率49.50%（得票数約7万3千票）を得て初当選。立法院では、外交・国防委員会に所属。同氏の父親は、嘉義県長や立法委員などを歴任した陳明文氏。



日本との関わりについて

——陳委員は、現在の台湾の立法院では数少ない日本留学経験を有する立法委員の一人ですが、これまでの日本との関わりについて教えてください。

陳委員 日本には早くから関心を持っており、留学を希望していました。最初に日本に留学したのは、米国留学中の大学2年生の時であり、日本語を勉強するために、大学の休み期間を利用して3

週間ほど立命館大学の日本語コースに短期留学しました。当時、日本語はほぼ白紙状態であったため、「あいうえお」から日本語を学びました。印象深く覚えているのが、私が留学した同年（2007年）に中国の温家宝首相が立命館大学を訪問したこともあり、留学した際には日中友好ムードが盛り上がりを見せていたことです。

3週間の短期留学は日本について理解するのに不十分であり、更に日本について理解を深めたいとの思いから、その後大学の交換留学制度を利用して早稲田大学に留学しました。当時、私の日



大学院生時代に日本の学生との交流で台湾について紹介
(陳冠廷委員提供)

本語はまだ片言レベルでしたが、幸いなことに、私が留学した早稲田大学国際教養学部では英語で授業が行われていたことから、留学中は英語を通じて日本についての理解を深めながら、日本語の学習に取り組むことができました。

この留学を通じて、より専門的に日本について研究したいと考えるようになり、米国の大学卒業後は、東京大学公共政策大学院に入学しました。今振り返って特に印象に残っていることは、専攻が公共政策であったこともあり、大学院での授業以外に、実践の場として様々なインターンシップに参加したことです。この経験は、日本社会をより実感を伴った形で理解する上で大変貴重なものでした。具体的には、日本赤十字社や安井美沙子参議院議員（当時）の議員事務所等でインターンシップを行いました。

——日本の議員事務所でのインターンシップについて、どのようなことが特に印象に残っていますか。

陳委員 印象的であったのは、安井美沙子議員に促されて参加した様々な分野にわたる国会議員の「勉強会」についてです。実際に参加して、勉強会が国会議員の能力向上や政策形成にとって重要な役割を担っていることを実感しました。当時は、TPPへの対応が国会内で大きな問題となっていたことから、私が参加した勉強会でも世論への説明をどのように行うべきかなどについて、国会議員の間で活発な議論が交わされていました。こう



本年1月、嘉義にて安井美沙子元議員と再会
(陳冠廷委員FBより)

した国会の現場に立ち会えたことは、安井美沙子議員のお陰であると感謝しております。安井美沙子議員とは、インターンシップ終了後も交流を続けており、今回、私が立法委員選挙に立候補した際には、私を激励するために、日本から嘉義まで駆けつけてくれました。

このインターンシップの経験は、立法委員となった現在、日本の国会議員との交流において、非常に役に立っています。同じく立法府の議員ではありますが、日本と台湾では議員の政治的な役割や慣習に違いもあります。短期間ながらも、インターンシップを通じて、そうした違いについて触れることができたことは、日台の議員間交流を行う際の前提知識として私の強みになっています。

日台関係に対する見方

——陳委員は、今年4月に日本を訪問し、日本側との間で交流を行われましたが、今回の訪日の成果について教えてください。

陳委員 今回の訪日では、主に日本維新の会や立憲民主党に所属する国会議員との間で意見交換を行いました。特に印象深かったのは、日本維新の会の馬場伸幸代表を訪問した際、同代表の議員事務室に李登輝元総統の格言である「誠實自然」の額縁が掲げられていたことです。改めて、李登輝元総統が日本の政界に与えた影響の大きさについて強く実感しました。

また、両党の国会議員との間では、安全保障や



本年4月、馬場伸幸代表と会談
(陳冠廷委員FBより)

少子化、教育問題など幅広い議題について意見交換を行いました。これまで、日台の議員間の対話においては、観光交流についての議論が多かったように感じますが、今後は、こうした少子化、教育など日台双方が共に課題に直面する内政分野に関する意見交換が益々重要になると思います。このほか、旧知の大島敦議員とは、インターネット時代における政治のあり方について有益な議論を行うことができました。

現在、日台間では民進党と自民党との間で与党間の緊密な関係が構築されていますが、日台関係の更なる発展という観点からは、それに加えて、日本の各野党との関係構築もより一層重要になると考えます。私自身、与野党を問わず、裾野が広い日台関係の構築に向け、積極的に交流を行っていきたいと考えています。

——これまで日台関係を牽引してきた日本語世代が少なくなる状況において、新たな世代の知日派議員として、今後如何にして日台関係を発展させていくべきと考えますか。

陳委員 日台関係においては、日本語世代やその世代の影響を強く受け、日本留学経験者も多かった第二世代が台湾側では主たる役割を担ってきました。ただ、その次の世代にあたる台湾の若年層の間では、欧米留学が主流となっており、残念なことに、これまで日台間に存在した日本語という共通の言語土台は失われつつあると感じます。このことは、我々の世代に課された大きな課題です。

この点、現状に鑑みれば、台湾における英語重視の傾向は今後更に強まると考えられることから、日本語という共通の言語土台に頼らない関係を構築していく必要があると考えます。

ただ、この面で言えば、日本には台湾にはない「強み」も存在すると思います。それは、私がかつて留学した早稲田大学をはじめ、日本には英語の課程のみで卒業できる大学・大学院が数多く存在することです。これは幼少期から英語を学んできた台湾の若年層にとって大変魅力的です。そのため、新たな知日派の育成という観点からは、日台双方間で新たな共通の言語となっている英語を通じて日本社会に対する理解を促し、そのうえで徐々に日本語の習得を促すような形が理想的なのだと思います。

立法院においても、かつては日本語を流暢に操り、日本との間で架け橋の役割を担ってきた立法委員が数多くいましたが、現在の立法院には日本留学経験者は私を含め数名しかおりません。他方で、日本に関心を持つ立法委員は、決して減っておらず、多くの立法委員が引き続き関心を持って日本社会を見ています。この点から言えば、日本台湾交流協会が行っているフェローシップ事業は、非常に有効なツールであると思います。私自身、2016年に、同フェローシップ事業を通じて、国立社会保障・人口問題研究所にて一か月強、研究活動を行いました。この間、当初より関心のあった国民健康保険の診察報酬支払方式に関する日台の比較について見識を深めることができ、こ



本年7月、日本戦略研究フォーラム主催の台湾有事シミュレーションに郭国文委員と共に出席（陳冠廷委員FBより）

の経験は立法委員となった今でも大変役に立っています。立法委員を含め実務経験者において訪日に関心を持つ人は非常に多いため、更なる枠の拡大を含め、同フェローシップ事業の発展は、知日派の養成にとって大きな成果が期待できると考えます。

——日台関係を推進する立法委員の議連として、現在立法院内に「台日交流聯誼会」と「亜東国會議員友好協会」の二つの議連が存在していますが、二つの議連の違いについて教えてください。また、陳委員は現在「亜東国會議員友好協会」の副会長職を担っていますが、今後同議連として推進していきたい分野などはありますか。

陳委員 二つの議連では、参加している幹部メンバーに大きな違いがあります。「台日交流聯誼会」は韓国瑜立法院長が会長職を担っておりますが、「亜東国會議員友好協会」は民進党立法委員の郭国文氏が会長職を務めています。郭国文委員は、台南市出身の立法委員であり、かねてより頼清徳總統と非常に近い間柄にあります。私も「亜東国會議員友好協会」の副会長として、今後同議連を通じて日本との交流を積極的に進めていきたいと考えています。具体的な協力分野としては、既存の交流に加え、例えばAIやドローンをはじめとする新技術など、今後益々重要になる専門分野をめぐる協力を推進していきたいと考えています。

日台の若年層の政治的態度について

——日台の若年層の政治的態度の違いについてはどう見えていますか。

陳委員 台湾では總統選挙で若年層の投票率が7割を超えるなど、若年層の政治参加が非常に活発です。その原因として挙げられるのが、有権者が次の指導者を直接選出する選挙制度であることから、変化を望む若年層が自らの期待を新たな指導者に直接寄せられる点です。一方、日本人は安定を重視する傾向が強く、それが政治にも表れていると思います。選挙後も急激な変化が起こることはなく、常に社会は安定し、治安も良好な状態が



前記台湾有事シミュレーションの後、小野寺五典元防衛大臣、李喜明元参謀総長他と意見交換（陳冠廷委員Xより）

維持されます。逆説的ではありますが、そうした安定した社会の状況が、若年層の積極的な投票行動に繋がらない原因となっている様にも感じます。

——今回の總統・立法委員選挙では、台湾民衆党が若年層の間で支持を広げたと言われています。こうした動きについてはどのように見えていますか。

陳委員 台湾では1996年に行われた最初の總統選挙以来、これまで同一政党で二期8年以上を務めたことがなく、今回頼清徳總統の当選が初めてのケースとなります。他国と同様、台湾の若年層の不満は政治的な変化を求める動きに繋がる傾向があります。今回の總統選挙で、台湾民衆党が支持を集めた背景には、若年層の間に存在するそうした感情があったのだと見ています。ただ、選挙戦の終盤には、蔡英文前總統と蕭美琴副總統が揃って投票を呼び掛けるビデオを放送したとこ



本年7月、台日ドローン産業戦略フォーラムに出席（陳冠廷委員FBより）

ろ、若年層の間ではこのビデオを見て、「蔡英文総統の8年間はやはり間違いではなかった」と再認識し、民進党支持に回帰するような動きも見られました。

今回の選挙結果が我々に与えた警鐘は、しっかりと政権運営をしなければ、直ちに政権交代が起こる可能性があるという点です。実際、若年層の支持の移り変わりは非常に早く、選挙後の数か月で、若年層から熱狂的な支持を集めていた台湾民衆党への支持が急速に低下しています。緊張感をもって、驕らずに政権運営を行っていかなければ、同様のことが民進党にも起こり得るのです。

——若年層の立法委員として、今後どのような政策を推進していきたいと考えていますか。

陳委員 これまで私が専攻としてきた国防面での政策を進めることともに、特に若年層の教育問題について取り組んでいきたいと考えています。具体的には、グローバル化の中で、台湾にとって国際交流の機会は益々重要になっています。こうした状況に対応するため、政策面では、より充実した奨学金制度を確立し、より多くの台湾の若者が海外で交流を行えるような環境づくりを行っていくことが重要であると考えます。

最後に

——最後に、今後の日台関係についてどう考えますか。

陳委員 私はかねてより、日台関係は3つの段階を経て発展させていく必要があると考えてきまし

た。具体的には、第一段階として、双方が相手を好意的に捉え、また相手に対して期待を抱く発展期。第二段階は、双方が互いの相違点や弱点について認識し始め、摩擦が生じる適応期。第三段階は、双方がお互いの弱点を補完し合い、双方間の全面的な理解を通じて、様々な分野で相互協力が進展する深化期です。私は、現在の日台関係は、国民感情において第一段階にあると思います。実際、相互間で大変良好な感情が育まれ、経済や文化などの分野で様々な交流が進展しています。他方で、今後交流が進展すればするほど、第二段階に入り、相互間で相手の嫌な面や弱点が見えてくることもあると思います。ただ、それは日台関係の更なる発展にとって乗り越えるべき重要な時期であり、相互間で相手の弱みを自身の強みによって埋め合わせる努力を行うことができれば、相互の関係は第三段階の形にまで進化させることができます。私も日台双方の社会を知る者として、そのために少しでも尽力したいと考えています。



取材中の一コマ